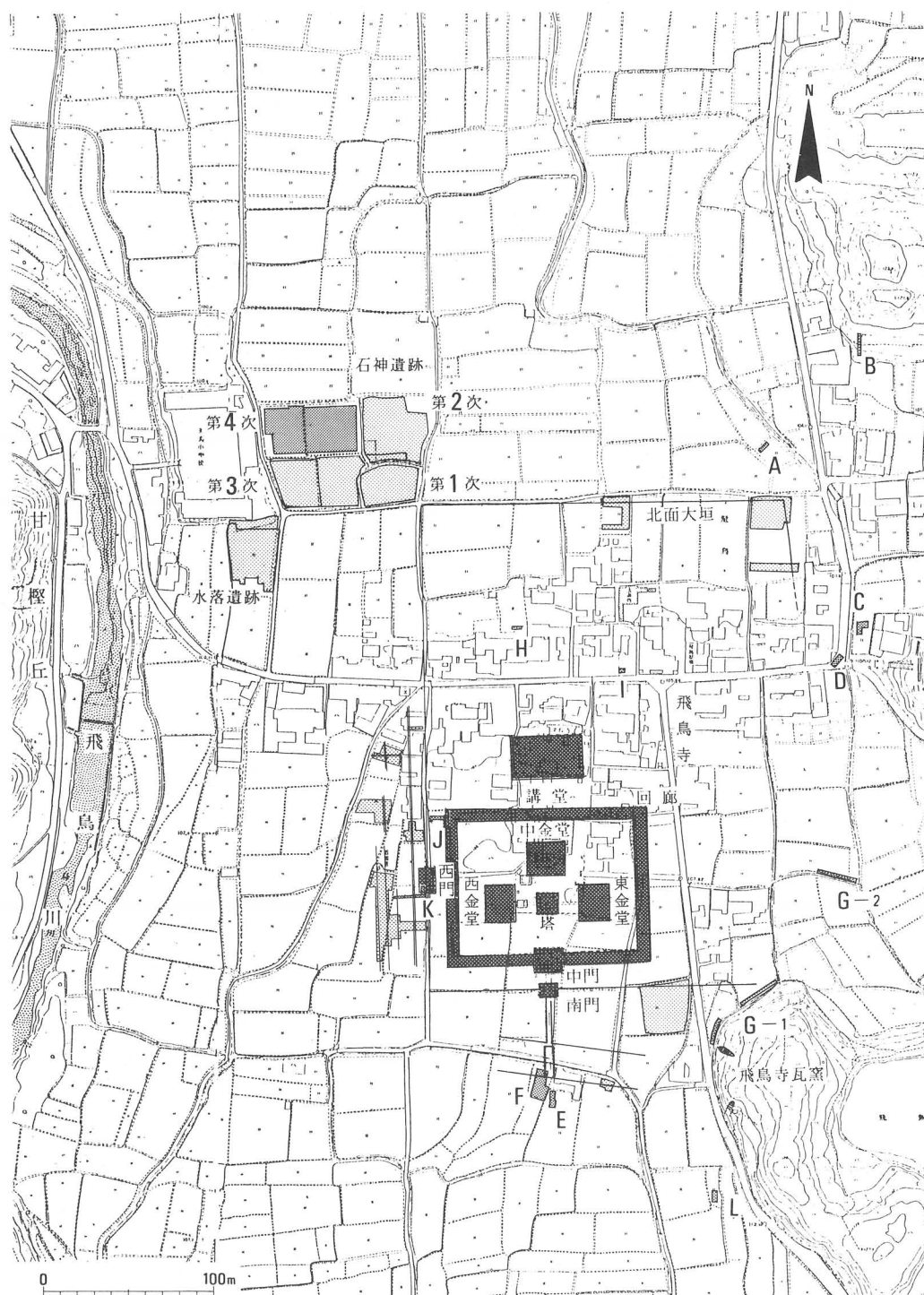


III 飛鳥地域の調査



第22図 石神遺跡・飛鳥寺周辺調査位置図 (1:4000)

1 石神遺跡第4次調査

(1984年7月～1985年5月)

石神遺跡の名は、その小字名に由来する。当地域は、飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に北接している。1902(明治35年)年に第1次調査区から、噴水施設と考えられる須弥山石・石人像が発見されて以来、同遺跡は、斉明朝の饗宴広場、あるいは天武朝の飛鳥浄御原宮とも推定されてきた。当調査部では、1981年から、石神遺跡の発掘調査を継続して実施している。過去3回の調査を通して、須弥山石の転落位置(SX150)が確認されるとともに、その周囲に配された石組溝、石敷を伴う掘立柱建物、あるいは、この地区を南北に二分すると推定される基壇付きの東西塀等の存在などが明らかになった(第31図)。これらの遺構は7世紀中頃から後半の時期と考えられることから、7世紀中頃には水落遺跡を含めたこの一画が、塀を境として、南は漏刻地区、北は饗宴の広場地区として性格を変えて利用されていたと推定されるに至った。さらに、塀の位置が7世紀後半にも踏襲されていることから、この付近に想定される飛鳥寺西の広場の利用形態を知る手懸りを得た。今回は、このような過去の調査成果を踏まえながら、各時期の遺構の範囲確認とその実態究明を目的として調査を行なった。調査地は第2次調査区に西接し、第3次調査区に北接する水田で、東西長は50～53m、南北長は28～30mである。

遺構検出を行なった地山面(暗褐色砂礫上面)は、調査区東南部から北西部に向って緩かに傾斜し、45cm北西部が低い。堆積土もSD640の東肩を境にして、調査区東半部と西半部では異なっている。東半部での堆積土は、耕土(約20cm)、床土(約20cm)、褐色土(10～20cm)、暗褐色砂礫となるのに対して、西半部は耕土、床土、淡褐色土(約10cm)、褐色土(5～20cm)の下にC期の整地土である含炭暗褐色土(10～20cm)、A-2期の整地土である山土を含む灰褐色土が部分的に認められ、以下、暗褐色砂礫となる。また、暗褐色砂礫とその下にある褐色砂礫は、縄文時代から古墳時代にかけての遺物を少量含んでいる。

(1) 遺構

検出した遺構は7世紀前半から中世にかけての時期のものである。ここでは、7世紀中頃から8世紀初頭にかけての時期の遺構とその他の時期の遺構にわけて、その概略を述べる。遺構配置図には、最終検出面の主要遺構を図示した。

7世紀中頃から8世紀初頭の遺構

この時期の遺構は、建物・堀の方位、重複関係、整地土、出土遺物を考慮すると、A・B・Cの3期に大別される（第2表）。

＜A期＞ 建物・堀の方位が方眼北に対して東に約 2° 振れるものである。石組溝もこの時期に含まれるが、過去3回の調査を通してみても溝の方位は必ずしも一定していない。A期の遺構は重複関係からさらに3期に細分される。

A－1期の遺構は、井戸1，掘立柱建物2，石組溝4，方形区画，石敷がある。石敷を伴う井戸SE 800を中心にして、その東西に掘立柱建物SB 750・810，SB 750の東に北流する溝SD 730・332，南に西流する溝SD 744，SB 810と重複して北流する溝SD 790などの石組溝，井戸の南西部には石敷SX 700・771，井戸の南には方形区画SX 760が配される。

井戸SE 800は，くりぬいた最大厚18cmの杉材2枚を組み合わせ井戸枠とし，周囲に人頭大の玉石を方形に敷き，石敷縁として北を除く三方に側石をたてたものである。石敷

時期	遺構番号	種類	規 模		柱 間 寸 法 (桁，梁)
			桁行×梁行	総長 (m)	
A	1	SB 750 東西棟	8 × 3	18.16 × 6	2.27, 2
		SB 810 東西棟	(8) × 2	(20.8) × 5.2	2.6, 2.6
	2	SB 745 南北棟	5 × 3		1.65～2.95 (桁)
			2	11.4 × 5.8	1.93; 2.9 (梁)
	SB 811 東西棟	(6) × 2	(15.6) × 5.0	2.6, 2.5	
	3	SB 735 南北棟	3 × 3	7.2 × 6.0	2.4, 2.0
		SB 736 南北棟	3 × 3	7.2 × 5.4	2.4, 1.8
		SB 820 南北棟	(6) × (2)	(14.4) × (4.8)	2.4, 2.4
		SA 670 南北堀	(16)	(27.1)	1.69
		SA 775 南北堀	(11)	(22.5)	1.8 ～ 2.25
B	SB 770 南北棟	8 × 2	19.9 × 4.8	2.1 ～ 3, 2.4	
	SB 742 南北棟	(2) × 2	4.8 × 4.8	2.4, 2.4	
	SA 731 東西堀	(2)	(4.2)	2.1	
	SA 732 南北堀	(16)	(26.4)	1.65	
	SA 751 南北堀	(13)	(27.3)	2.1	
C	SB 830 南北棟	3 × 3	6 × 5	2, 2; 1.5 (中; 脇)	
	SA 780 東西堀	(8)	(19.2)	2.4	
	SA 781 南北堀	(6)	(15.0)	2.4, 2.7	

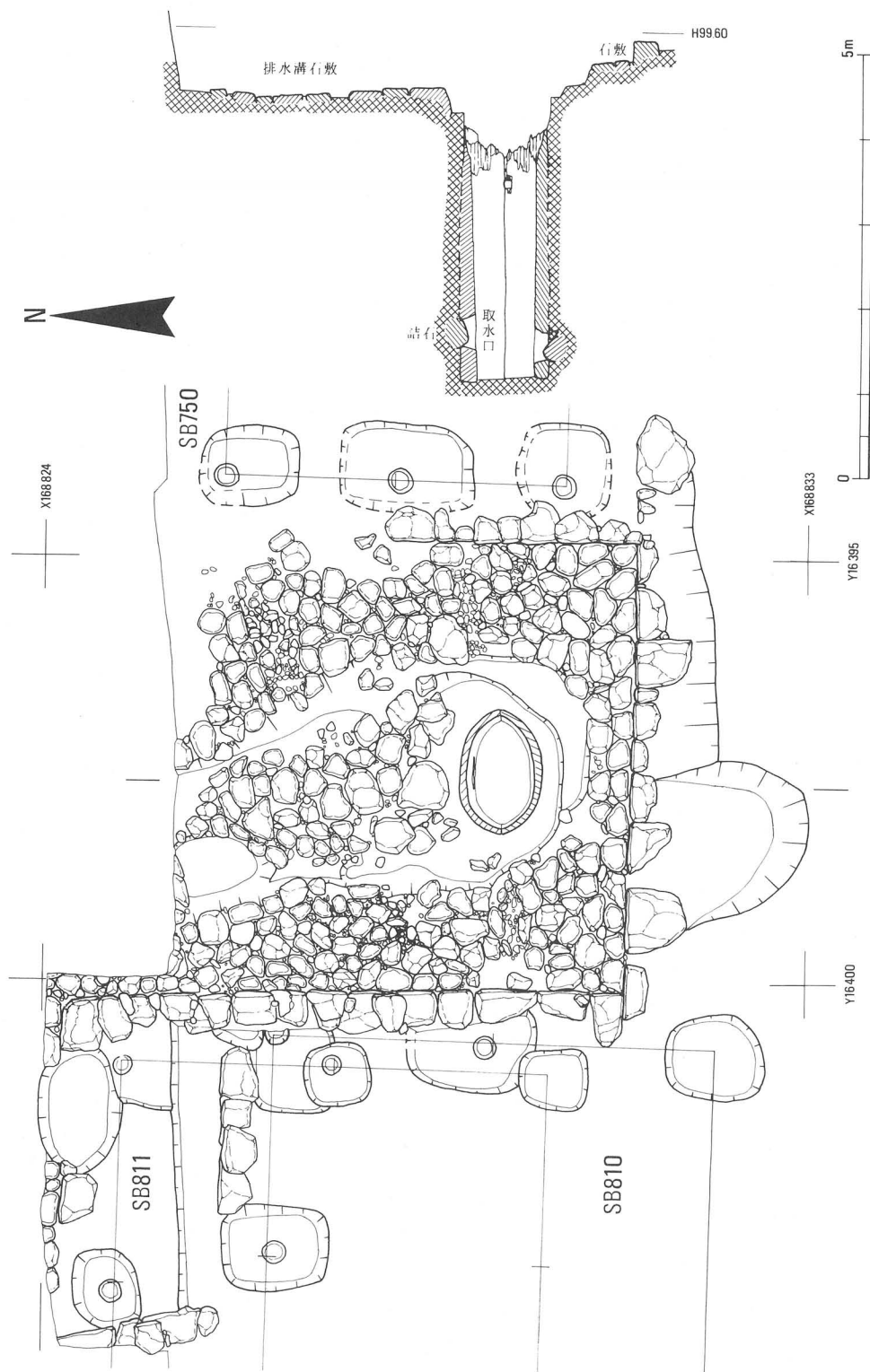
第2表 石神遺跡第4次調査主要遺構一覧表 () 以上

面からの井戸の深さは、3.8 mあり、約3 mほど井戸枠が残っているが、底に特別な施設は認められない。井戸枠の平面形は紡錘形を呈し、東西内法長は上面で1.37m、底面で1.2 m、南北内法長は各々0.81 mと0.67 mあり、底に向かって若干すぼまっている。井戸枠の北と南には、底面から北で35 cm、南で15 cmの位置に45～40 cmの楕円形を呈する孔が穿たれている。円形孔は井戸の内側から穿たれたもので、断面形は円錐台形をなし、掘形側の径は31～34 cmとなる。土砂の流入を防いで清浄な水を得るために孔の掘形側に石を詰めていることや調査時には井戸底からの湧水がほとんどみられず、この孔からのみ出水していたことなどから、円形孔は井戸の取水口の役割を果たしていたと推定され、構造的にも注目される。井戸からは多数の土器、木製品が出土した。

井戸枠周辺の石敷の東西幅は5.3 mあり、若干北に低くなっている。また、この石敷とは別に、井戸枠の北側から約1.4 mの幅で北の方へのびる排水施設と考えられる一段低い石敷がある。側石は1～2段、高さ20～40 cm残るが、近くにある石敷S X 775の上面から井戸の石敷面までは約1 mの比高差があるので、本来は4～5段積まれていたものと推定される。側石のうち、西側石では改作の状況がうかがえた。西の側石は、当初南西隅から4.8 mの位置で西に折れ、さらに3.7 mの位置で北に折れていたものが、A－2期には西側石を1.9 m北に延ばし、南北長を6.7 mとし西折する。西折した側石の北側にも東へ傾斜して玉石が敷かれている。また西折したいずれの側石も柱掘形にかかる部分は後に建物の柱を抜き取る際に抜き取られている。井戸枠は現地に埋め戻したため、井戸の掘形は検出していない。

井戸の東西に配された建物S B 750・810はいずれも東西棟で、井戸の側石と柱掘形との間の重複関係から、先ず柱を建て、その後、井戸の側石を据えていることが判明した。さらに、柱抜取痕跡は、側石の掘形より新しい状態で検出されるので、井戸と建物は同時に存在していたものと考えられる。

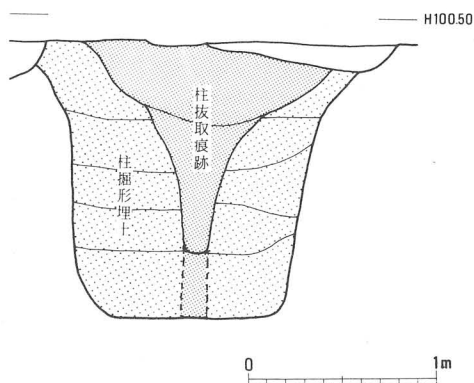
A－1期の建物の柱掘形は褐色砂礫土で埋め戻され、柱は全て抜き取られている。柱を抜く際には、柱周囲を不整形に掘り下げ、その後、ほぼ真上に柱を抜き取り、その跡を橙色や青灰色を呈する山土で埋め戻す特徴がある。



第24図 石敷井戸 S E 800 周辺遺構配置図 (1: 80)

従って、柱抜取跡の下半部は平面形が円形を呈し、あたかも、柱痕跡のような状態となる（第25図）。建物 S B 750 の柱掘形の一边は 1.5 ～ 2 m、深さは約 1.5 m となる。桁行 8 間の中央にはほかよりも小ぶりの間仕切りの柱穴がある。建物 S B 810 は東西に 8 間分あり、さらに調査区外に延びている。東妻柱列の柱穴は、C 期の塀 S A 781 の柱穴によって一部壊され、西部では A - 3 期の柱穴によって壊されている。柱掘形の底面のレベルを見ると、井戸寄りの東妻柱、北側柱列の東から 1・2 番目の柱穴は、他の柱穴よりも 60 ～ 70 cm 深く掘られている。このような傾向は S B 750 の西妻柱列の柱穴にも認められており、井戸の石敷の側石に接する部分は特に深く掘られたものであろう。A - 1 期の建物の柱間寸法は等間となるが、その適切な規準尺については検討中である。なお、A - 3 期以降では 1 尺が 30 cm 弱と考えられる規準尺が用いられている。

石組溝の側石は大半が抜き取られている。S D 730 は底石として玉石 3 ～ 5 石を敷き詰めたもので、幅は約 70 cm に復原できる。溝の底石は B 期の塀 S A 732 の柱穴によって壊されている。底石上には溝本来の堆積土である灰褐色砂が約 1 cm の厚さで認められた。S D 332 は、S D 730 よりも小さめの石を底石として使用している。側石は東側に一石のみ残り、側石上面からの深さは約 40 cm となる。溝幅は約 90 cm である。両溝とも長さ 28 m 分を検出した。西流する石組溝 S D 744 は北側石が 4 石残り、深さは約 15 cm である。底石は用いられず、溝には灰褐色砂質土が堆積していた。この堆積土を切って A - 2 期の柱穴が掘られている。調査区の西方の石組溝 S D 790 も底石が南北 2 列に残り、幅 0.6 m



第25図 S B 750 柱掘形断面図（1：40）

で 5.8 m 分を検出した。南と北では底石が抜き取られている。北壁の断面観察によると、石溝の掘形より先に S B 810 の柱穴が掘られ、石溝の石を抜き取った後に柱が抜き取られているので、建物と石組溝とは共存していたと思われる。

井戸の南方に方形区画 S X 760 があ

る。幅20～30 cm，深さ25 cmの溝状の遺構が一辺約4 mで方形に巡っている。溝状遺構の中央部は粘土化し，北西隅では，先端部を東にして長さ約30 cmの釘が出土した。釘に，縦方向と横方向の木目が残っていることから，方形の溝状凹みには四隅を釘止めにした木材が埋設されていた可能性が強いが，方形区画内には関連する遺構もなく，その性格は不明である。井戸の南西部には，人頭大の玉石を用いた石敷S X 771 が約12 m²ある。B期の柱穴によって一部壊されている。縁石に相当するものはなく，その範囲は不明である。調査区南壁西寄にある石敷は第3次調査で検出した石敷S X 700 の北延長部にあたる。

A—2期の遺構には掘立柱建物2棟がある。S B 745 は南北棟で，桁行は5間であるが，梁行は北妻柱列が3間，南妻柱列が2間となる。側柱列の柱間は不揃いであるが，北妻柱列の柱間寸法は1.93 m等間，南妻柱列は約2.9 m等間となる。東側柱列の南の柱穴は，A—3期の建物S B 735 に伴う石敷の下となる。S B 811 は東妻柱列2間と北側柱列1間，南側柱列2間を検出した。S B 810 と同様に北東部の柱穴は深い傾向にあるので，ほかの柱穴は削平された可能性がある。おそらく，先述した井戸の西側石の北への拡張に伴って，S B 810 とほぼ同規模の建物が，その位置を約2 mほど北へずらして建替えられたものと想定される。柱抜き取りの状態はA—1期の柱抜き取痕跡と同じである。

A—3期の遺構には掘立柱建物2，掘立柱塀2，石組溝がある。建物，塀の柱は全て抜き取られている。建物S B 735 と建物S B 736 は西側柱筋を揃え，妻柱間の心々距離は約9 mである。両建物の南北規模は同じであるが，東西規模はS B 736 が60 cmほど小さい。建物S B 735 の柱掘形は東西方向の布掘り工法によって掘られている。布掘りの東西長は約7.5 m，南北幅は1.2～2 m，検出面からの深さは1.5 mである。掘形内は褐色砂礫土，最上面は人頭大の礫を含む礫群，柱抜き取跡は黄色粘土で埋め戻されている。この建物の四周には石敷が巡る。柱心からの石敷の幅は，北，南，東の三方が約1.6 m，西は約2.8 mである。石敷と建物の柱との間には溝が巡っており，この溝を建物と石敷との間に設けられた縁石の抜き取跡とみると，建物の床下は外周石敷より一段高くなっていたものと推定される。西面石敷の西側は黄褐色粘土上にバラスを敷い

ている。バラス敷 S X 743 は、S B 735 の周囲に幅広く敷かれたと推定されるが、遺存範囲は狭い。この建物の南面石敷の西延長線にはほぼ一致して、西流する石組溝 S D 734 がある。側石に一石をたて並べたもので、底石は使用されていない。溝幅は約 90 cm、深さは 30 cm である。溝内には灰褐色砂が堆積していた。

建物 S B 736 は身舎 2 間×3 間の東に庇の付く建物とも考えられるが、身舎部分に相当する南から 2 番目の柱位置には、花崗岩の自然石の平坦面を上にして据えた束石がある。その北の柱位置は、平安時代の土壌 S K 741 によって壊されているので、束石の有無は不明である。束石が一個残ることや柱筋を揃えた建物 S B 735 が総柱であることなどから、この建物も総柱と推定される。建物 S B 820 は調査区西端にある。南北 6 間以上、東西 2 間以上と推定され、柱掘形の一部は C 期の建物や塀の柱穴によって壊されている。柱掘形は一辺 1.2 ～ 1.3 m、深さは深いもので約 1.2 m ある。遺存状態の良い北から 3 番目までの柱掘形は、整地土から掘り込まれている。柱掘形は、下半部が灰褐色砂質土、上半部が黄灰褐色を呈する山土で埋め戻され、抜取跡の埋土は焼土を含む。

掘立柱塀 S A 670・775 は調査区西半部にある。塀 S A 670 の柱掘形には、黄褐色土で埋められた直径 15～30 cm の柱抜取痕跡が全てにわたってある。塀 S A 670 の西にある塀 S A 775 の柱抜取痕跡は直径 15 cm 前後と小ぶりである。

＜B 期＞ 遺構の方位が方眼北とほぼ等しいもので、掘立柱建物 2、掘立柱塀 3、炉跡がある。建物、塀の柱掘形の埋土は、山土を含む褐色土で埋められている。建物 S B 770 は調査区中央西寄りにある。北西隅の柱掘形は未検出で南の妻柱掘形もやや南にずれている。柱抜取法は A 期とは異なり、柱掘形を壊して抜き取っている。抜取跡からは藤原宮期の土器が出土した。建物 S B 742 は A 期の建物 S B 736・750 と重複している。東西 2 間、南北 1 間を検出した。塀 S A 732 は調査区東端にあり、柱間寸法は 1.65 m 等間である。この塀の南端柱穴を起点にして、東西塀 S A 731 が 2 間分ある。柱間寸法は 2.1 m 等間である。塀 S A 751 は C 期の素掘り溝 S D 640 の東肩にある。柱掘形は素掘り溝で壊されている一方、A—2 期のバラス敷を壊している。炉跡 S X 795 は調査区西端北寄りにある。一辺 0.6 m の範囲に黄褐色粘土が敷かれ、その中央部は熱

のため赤変して堅くしまっている。小鍛冶炉の炉床部分と推定される。

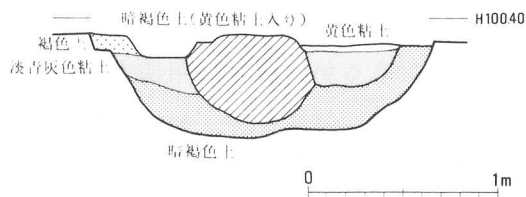
＜C期＞ 遺構は方眼方位北に対して、西に約 1.5° 振れる。掘立柱建物、掘立柱塀2、素掘り溝2のほかは土壌多数がある。建物、塀の柱掘形は、炭・焼土を含む暗褐色粘質土で埋め戻されている。塀SA780とSA781は直角に折れまがる一連の塀で、東西方向に8間分、南北方向に6間分を検出した。

塀の西北部分に南北棟の総柱建物SB830がある。柱掘形は一辺が50～70cm、深さは60cm前後である。素掘り溝SD640、SD621は北流する。両溝は、幅2.5～2.7m、深さ約0.4mとほぼ同規模であるが、SD621の方位は北でやや西に振れている。そのため、両溝の距離は内肩間で、南が約14m北が約12mとなる。いずれの溝も第3次調査で西流していたものが直角に北に折れている。このような状況から、溝間を通路とみなすことも可能であるが、そうすると路面上に同時期の土壌が掘られるなどの問題が残る。このほかに7世紀後半から8世紀初頭の土器を出土するSK748・749・755・762～764・773・774・776～779などの土壌多数と調査区南半中央寄りに小柱穴群SX752がある。

また、調査区西北地区を中心に、A期の石敷と比べて乱雑に敷いた石敷群を検出した。この石敷には、SX825のように直径1.5m、深さ0.35mの規模で掘りくぼめ、底面および側面に玉石を張りつけた遺構が伴っている。石敷群は、SB830やSA780・781の柱掘形の上面を覆っており、これらの遺構よりは新しいものである。石敷目地や覆土からの出土土器は藤原宮期のものを最新とするので、ここではC期の遺構とみなしておく。

その他の遺構

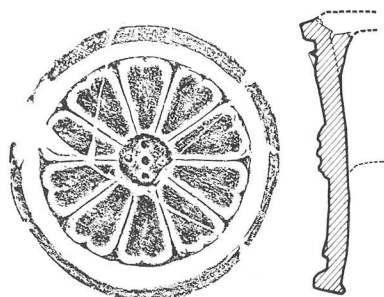
先の遺構に先行するものに、3条の斜行溝SD575・576・577がある。いずれも南東から北西方向に掘られ、SD577は北西部で西折する。断面形は逆



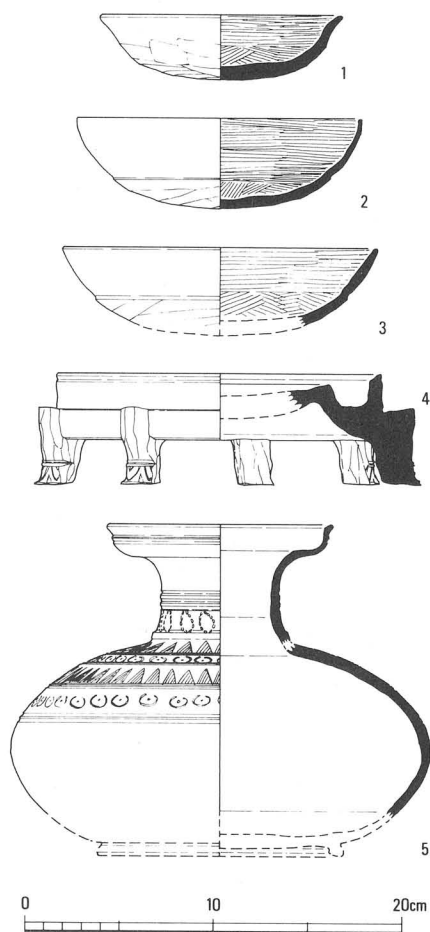
第26図 斜行溝SD755断面図(1:40)

台形を呈し、溝幅は約1.2m、深さは0.4～0.5mである。SD575の一部とSD577は溝の両肩に沿って、黄色粘土や黄色粘土入りの淡青灰色粘土で埋められている(第26図)。

断面形の形状や流水のあった痕跡もないことから、先の粘土帯を裏込めとみなせば、斜行溝は、本来木樋暗渠であった可能性が強い。いずれも、A期の遺構によって壊されていることや、3次調査で瓦片が出土していることから、7世



第27図 単弁10弁軒丸瓦 (1:5)



第28図 出土土器・土製品 (1:4)

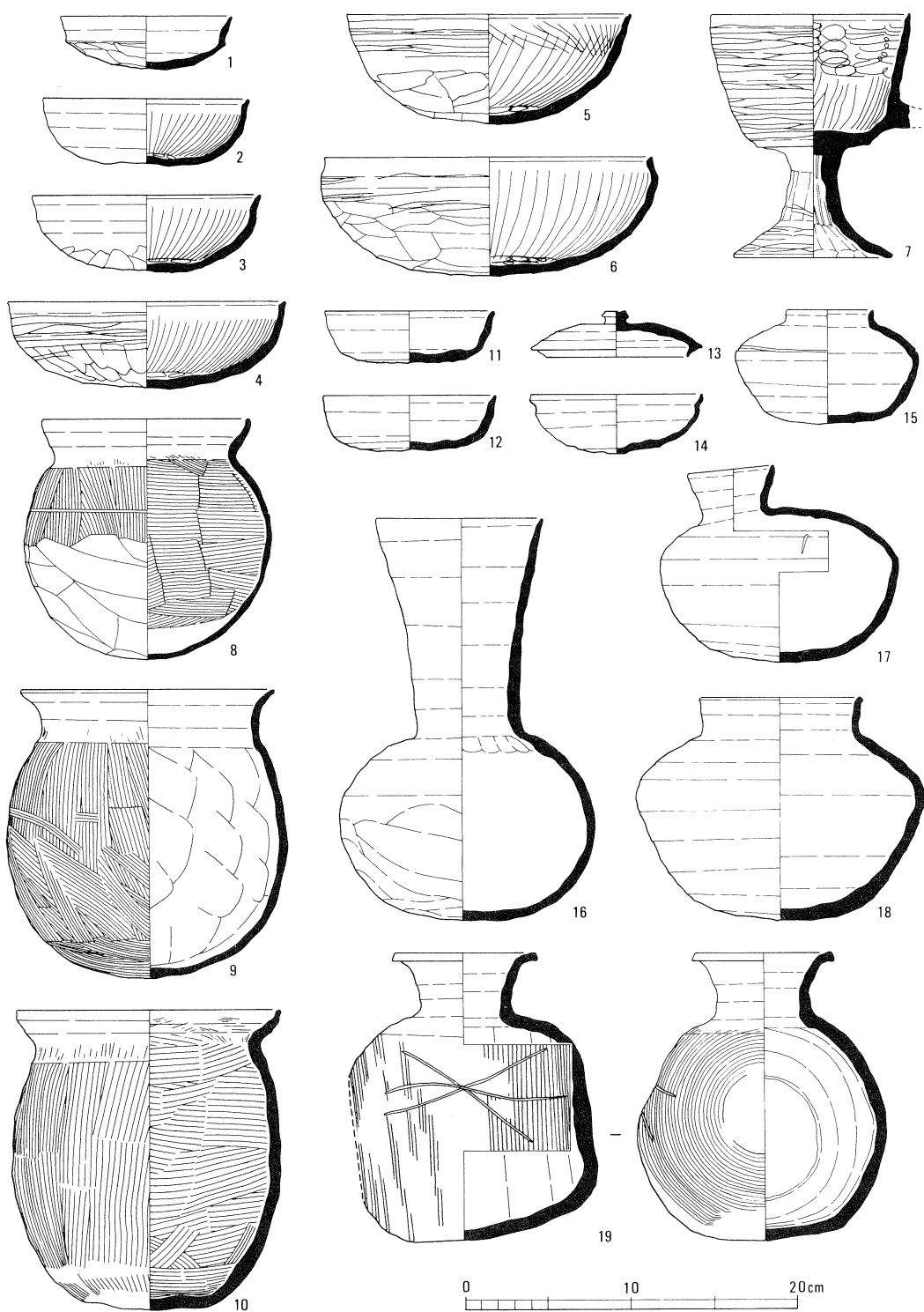
紀前半の遺構と考えられる。このほかに平安時代の素掘り溝 S D 630，土壇 S K 741 と中世の小溝がある。

(2) 遺物

瓦，土器，土製品，金属製品，木製品，石製品のほか，玉類，動・植物遺存体など多種の遺物が出土しているが，現在，整理中のため，ここでは特徴的なものを取りあげる。

瓦類は，主に調査区の南東部から出土した。これらのほとんどは S B 735 を覆った黄色粘土中に含まれていたものである。軒瓦は軒丸瓦26点を数える。大半は単弁8弁の角端点珠の軒丸瓦と，単弁10弁の軒丸瓦である。後者の瓦は飛鳥寺創建時の軒丸瓦に類似するが，中房の連子が1 + 4で中房の形状も円球状を呈し異なるものである。両者の軒丸瓦は，現在のところ，飛鳥寺寺域内では出土していない。

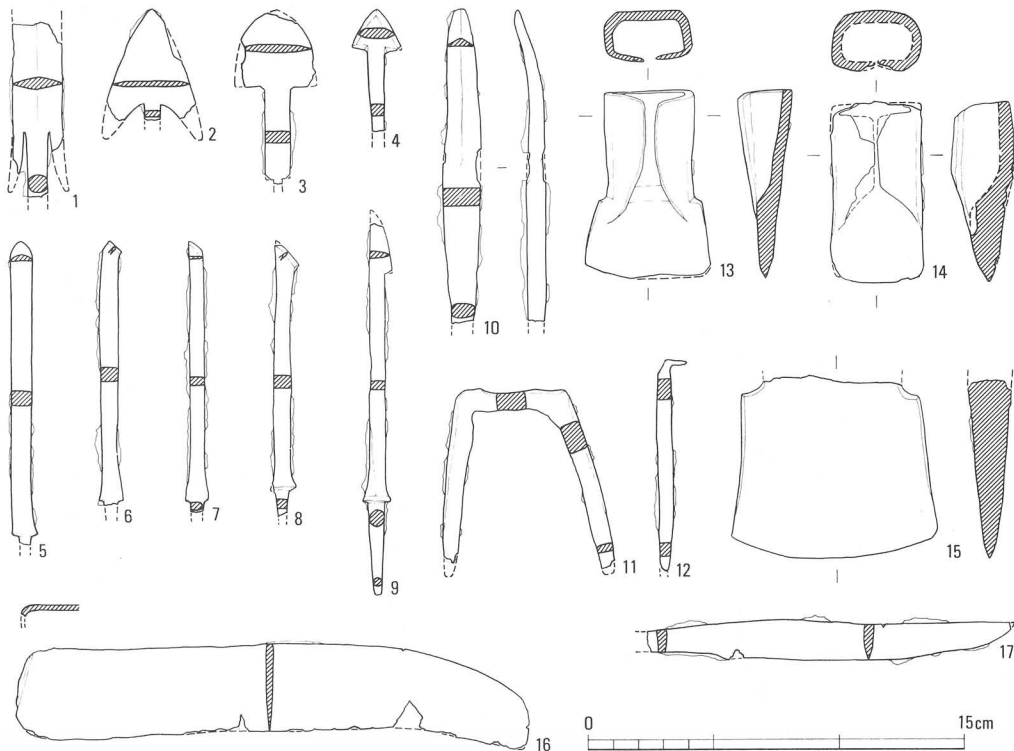
土器には，縄文式土器，弥生式土器，古墳時代の土師器・須恵器をはじめ，中世の瓦器などがあるが，7世紀中頃から8世紀初頭の時期（飛鳥Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）の土師器，須恵器がそのほとんどを占めている。同期の土器は井戸 S E 800 のほか，藤原宮期の



第29図 井戸S E 800 出土土器（1～10；土師器，11～19；須恵器，1：4）

整地土である暗褐色土や溝 S D 640，土壙から出土している。井戸の埋土からは，土師器，須恵器が約 200 個体出土したが，なかでも，土師器の甕，須恵器の平瓶，壺類の出土量の多さがめだつ。第29図 2・4 の土師器杯 C の特徴から，これらの土器は飛鳥Ⅲに属すると考えられる。藤原宮期の整地土及び遺構から出土した土器は，飛鳥Ⅳ・Ⅴのものが中心となり，ほかに，新羅土器や東国系の黒色土器がある（第28図）。新羅土器は壺で底部を欠く。頸部に楕円形の列点文，胴部上半に鋸歯状文と点半円文があり，口縁部から胴部にかけては薄い自然釉がかかる。焼成は良好で胎土の色調はセピア色を呈する。黒色土器は内面のみを燻した内黒土器で，底部外面には削り調整を施している（1～3）。

土製品には硯（獣脚硯，円面硯），土馬，フィゴの羽口がある。図示した獣脚硯には脚 2 本が残り，脚部が等間隔とすれば 9 脚に復原できる。焼成は良好で胎土の色調は新羅土器に似る。また調査区西半部を中心に焼土塊の小片が出土したが，そのなかには，白土で上塗りをした壁土がある。



第30図 出土鉄製品（1～9；鏃，10；ヤリガンナ，11；カスガイ，12；釘，13～15；斧，16；鏃，17；刀子，1：3）

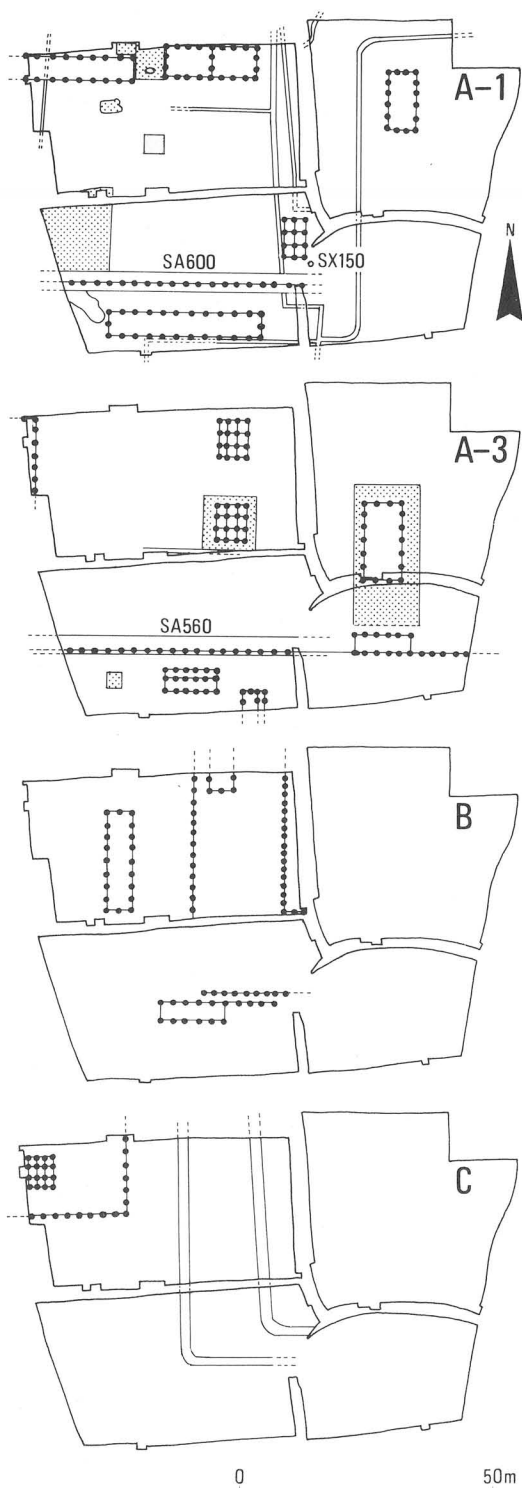
金属製品には大量の鉄製品のほか、少量の銅製品がある。鉄製品は主に藤原宮期の整地土、土壌から出土した。鍬、斧、鎌、刀子、ヤリガンナ、カスガイ、釘などがある。なかでも鍬は100点以上あり、注目される。大量な鉄製品の出土量から、付近に工房、あるいは保管庫のあったことが推定される。また、鉄滓が調査区西半部から少量出土した。

木製品は井戸から出土した。斎串、横櫓、刀子柄、小型の蓋、栓状円盤、先端を尖らした棒状品などがある。このほかに、縄、トチの実などの種子、ヒョウタン、二枚貝が出土している。

石製品には、井戸から出土した紡錘車、藤原宮期の整地土から出土した砥石、弥生時代の石鍬、石錐、剥片刃器がある。ほかに、勾玉、小玉、コハク玉などの玉類が出土している。

(3) まとめ

今回検出した7世紀代中頃から8世紀初頭にかけての時期の遺構を、過去の調査成果とともにまとめると次のようになる(第31図)。A—1期および井戸SE 800の石敷側石を改作したA—2期は、井戸出土土器が飛鳥Ⅲのものであることから、7世紀半ばをやや降る時期と考えられる。前調査で饗宴地区と推定した堀SA 600から北では石敷を伴う井戸を中心に大規模な建物を配置している。このあり方は、今後、饗宴地区の構造を知るうえで重要な手懸りとなるものと思われる。A—3期の時期には、堀SA 600の位置は、堀SA 560として踏襲されるが、井戸、石組溝は埋められ、建物配置も異なっている。このように前期とは異なる改造の時期は7世紀後半でも天武朝の時期に求められよう。なお、今調査でA期とした遺構は方眼北に対して、約2°東に振れているのに対して、過去の調査で検出したA期の遺構の振れは約1°弱であり、そこに施行基準の相違があったことも推定される。B期の時期は、遺構の重複関係や出土遺物から藤原宮期まで下らない。すでにSA 560は廃され、漏刻地区と饗宴広場地区を区画した施設は認められない。このことから、B期にはA期とは根本的に異なる単位のもとに当地域が利用されていたことが想定される。C期は藤原宮期にあたり、B期の南北堀の位置を踏襲するかのように素掘り溝が掘



第31図 石神遺跡主要遺構変遷図（1：1500）

られ、そこから離れた西北部は塀で区画されているが、検出した建物の規模・位置からみて、この地区の中心建物と言いがたい。従来この時期の遺物は大量に出土していたにもかかわらず、遺構は稀薄であった。今回、建物・塀を検出したことにより、藤原宮期における利用形態の一端を明らかにしたといえよう。

以上のように、7世紀中頃から藤原宮期にかけて、ほぼ連続して利用されていた石神遺跡の状況が明らかになった。しかし、各時期によって利用形態は明らかに異なっている。飛鳥寺西の広場が当地域にも及んでいたものとの推定がすでになされているが、遺構の状況から判断すると『日本書紀』の皇極朝から持統朝にみられる飛鳥寺西の広場が一貫してその性格を変えなかったとはみなし難い。各時期の遺構は、さらに西方や北方に及んでいる。その範囲、構造の確認や当地域が長期間公式の場として利用された背景の解明、飛鳥浄御原宮をはじめとする飛鳥諸宮との関連については周辺地域の発掘調査の進展を待ちたい。

2 飛鳥寺とその周辺地域の調査（調査位置は54頁参照）

a 石神遺跡東方（A地点）の調査

（1984年4月）

この調査は住宅改築に伴う事前調査として明日香村飛鳥で行った。調査地は飛鳥寺寺域東北隅の北方約30 mにあたり、北流する八釣川の西岸に接している。調査は東西5 m、南北1 mのトレンチを設定して実施した。床土の直下から河川堆積層が続く、遺構は河川によって削平されたとみられる。

b 石神遺跡東方（B地点）の調査

（1984年8月）

この調査は、明日香村農業協同組合の駐車場新営に伴う事前調査として、同農協東側裏手の畑地で行なった。当該地は東から西に延びる支丘陵の先端に位置し、『飛鳥誌』（1944年）に飛鳥氏の壘と称する山城跡と伝える。現在、北垣内の小字名が残り、矩形にめぐる濠状の窪みが一部認められる。駐車場予定地はこの小丘陵南裾の北から南に傾斜する長さ20 mほどの台地上に位置する。調査は幅1.3 m、長さ14.6 mの南北トレンチを設定して、約19 m²を発掘した。調査の結果、地表下約60 cmで花崗岩風化土の地山面を確認し、調査区北端から約6 mの位置で地山が急下降していることが判明した。山城の造営に伴って削平された人為的なものであるか否かはさらに周辺部の調査を待ちたい。黒色土器、燈明皿、播鉢等中世の遺物が少量出土している。

c 飛鳥寺寺域東方（C地点）の調査

（1983年12月）

調査地は飛鳥坐神社参道の北、石垣の西の水田で、現地が駐車場に改修されることになったため、事前調査を行なった。発掘面積は18 m²である。水田の耕土・床土は2層をあわせて約50 cmの厚さがあり、その下には古い沼地の堆積土

がひろがっている。沼土の上層は厚さ約50 cmの青灰粘土、下層は水田西端付近で厚さ約50 cmだが、東に急に深くなっている。上・下層とも植物遺存体を多く含むが、人工遺物は認められなかった。調査区内で、この沼堆積土上層から切り込まれた溝の一部を検出した。溝は幅約 5.5 m、深さ約80 cmの規模をもち、水田西側の村道にほぼ並行して、南から北へ流れている。溝西肩から村道端までの距離は約 3 mである。溝下層には厚さ10～20 cmの灰色の粗い砂が、上層には暗灰色の粘土が堆積している。下層からは藤原宮期の須恵器・土師器の小片が出土し、上層には多量の格子叩き・縄叩き目の瓦、そして各時期の土器片が含まれていた。溝のつくられた時期ははっきりしないが、上層の遺物に12世紀頃の羽釜の破片があり、この溝が中世までは使われていたことを示している。

d 飛鳥寺寺域東方（D地点）の調査

（1984年1月）

この調査は、飛鳥坐神社参道前の水路改修工事に伴う立会調査として、実施したものである。道路下の既設暗渠を改修するため、幅 2.4 m、長さ約18 mにわたって道路下約 1.3 mの深さまで掘り下げた。その結果、現在の南北道路に平行して南北方向に3条の木杭列と石積が1列検出された。いずれも、旧水路の護岸施設と推定される。旧水路（南北溝）埋土からは瓦、土器（黒色土器を含む）が出土している。出土遺物の年代・遺構から見て、C地点の調査遺構と一連のものと考えられる。検出した南北溝は古代から中世にかけて使用された水路であり、何回も改修を行なったものと推定される。

e 飛鳥寺南方石敷広場（E・F地点）の調査

（1984年1月～3月）

調査地は、飛鳥寺南門に至る参道の真南にあたる場所で、1956年に検出した石敷広場に南接する。所有地の関係からE・F地点に2ヶ所のトレンチを設定した。調査地の層序は、基本的には、耕土・床土・茶褐色砂質土・灰褐色砂質土・灰褐色砂土・褐色粘質土・暗灰色砂土・青色粘土となる。遺構は灰褐色砂

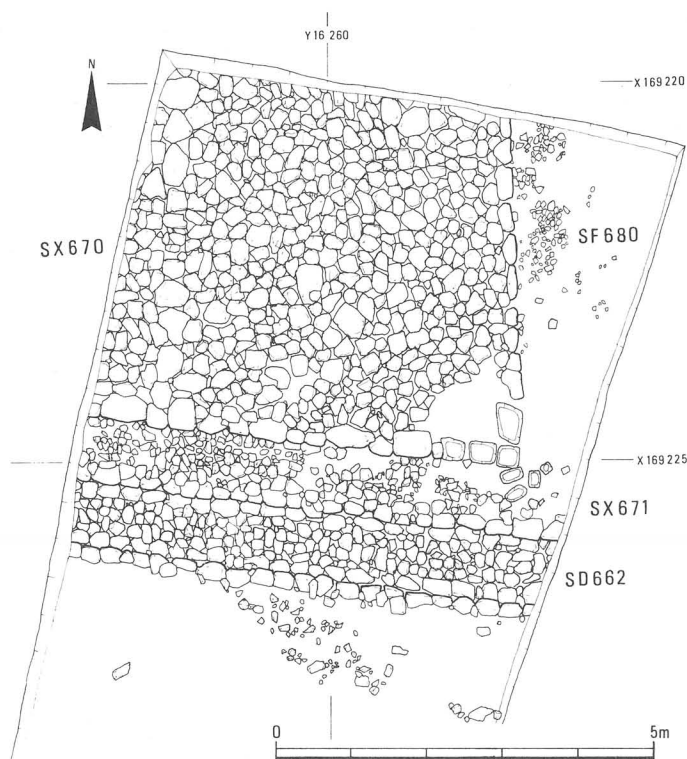
土上面で石敷・道路状遺構・石組溝を検出した。しかし、石組溝の南には、灰褐色砂土・褐色粘質土は広がっておらず、暗灰色砂土上面で土塁状の遺構、青色粘土上面で土管を連結する導水施設を検出した。

遺構

1. 石敷 SX 670・SX 671, 石組溝 SD 662, 道路状遺構 SF 680

これらは一連の造営によるものであることが石敷の土層観察によって判明した。SX 670 は 1956 年に検出した石敷広場と一連の遺構である。調査区北端より 5 m 分を検出した。石敷は東南隅部の一部の攪乱を除いて良好に遺存し、約 30 cm 大の河原石が敷き詰められている。南端・東端は一回り大きな河原石を南・東に面をそろえて立て並べ、縁石としている。東縁石はほぼ南北方向であるが、南縁石は西で北へ 7～8° 偏れている。石敷には東の縁石と並行するように南北に走る区画線の石列が認められ、石敷工程の単位幅（約 2.2 m）を示していると考えられる。SX 670 は、褐色粘質土によって整地し、平坦に造成してから東・南の縁石部に据え付け穴を掘って縁石を固定する。そして、縁石によって区画された内部を、南北方向区画線上に石を先ず敷き、その後に空間部を充填していく方法が取られている。

SX 671 は北限を SX 670 の南縁石とし、南限を石組溝 SD 662 の北側石とする幅 75 cm ほどの犬走り状の石敷である。SX 670 の石



第32図 石敷広場（F地点）調査遺構配置図（1：100）

敷面より約20cm下がった部分に設けられており、径10～15cmのやや小ぶりの河原石が敷かれている。道路状遺構SF 680の延長上にあたる部分は攪乱を受けており、SF 680を横切って東に続くものか、SX 670の東縁石の延長上ととぎれるものかは判然としなかった。

SF 680は、飛鳥寺南門に通じる未舗装の道路状遺構と考えられるものである。SX 670の東縁石以東には、石組は存在せず、抜取穴も認められなかった。この部分は当初より石は敷かれておらず、1956年に検出した幅3.7mの空地の南の延長上に当たることから、SX 670の東縁石以東は道路状の遺構SF 680になっていたものと考えられる。今回の調査ではSF 680の東限は調査地外であるため、幅員を確めることはできなかった。

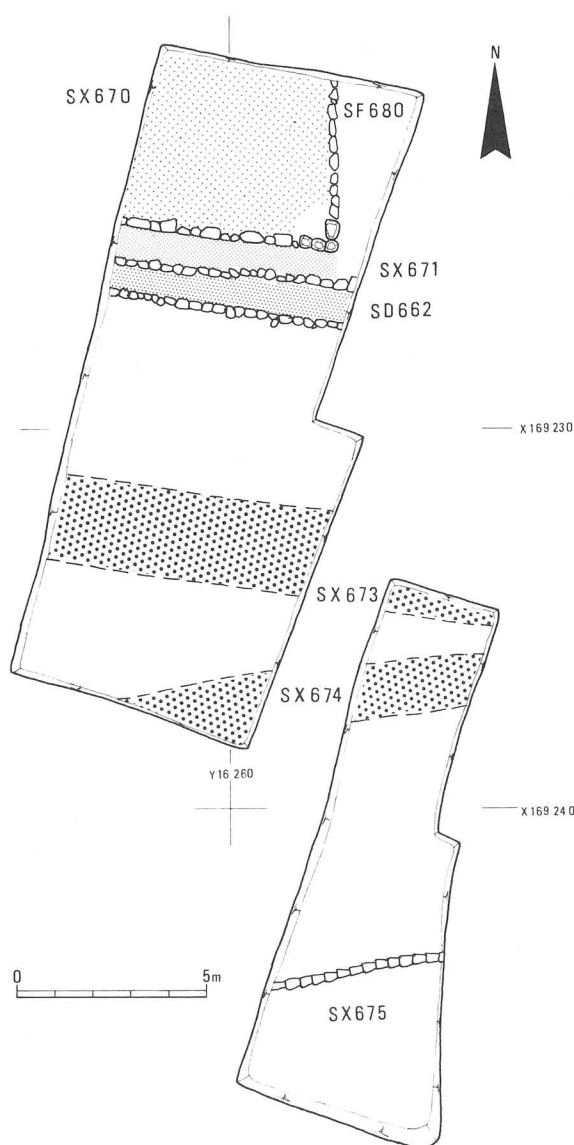
SX 671の南に接して東西方向にのびる石組溝SD 662が存在する。溝の両側には30～40cm大の河原石を立て並べて岸として、溝底にはやや小さい河原石を整然と敷きつめている。溝の深さは25cm、溝幅は70cmであり、道路状遺構SF 680を横切って、水は西へ流れていたものと考えられる。この溝は1982年度に本調査地の東方40mの地点で検出したSD 662と一連の石組溝である。なお、SD 662の下層からは7世紀前半に位置づけられる土器・瓦、古墳時代の須恵器が出土している。

2 土塁状の石積（SX 673，SX 674）

SD 662の南7mと11mで東西に走るSX 673，SX 674を検出した。幅はSX 673が6m，SX 674が4mある。ともに石組溝SD 662と振れが異なる。SX 673・674の構築面は、SX 670・SX 671・SF 680・SD 662構築にあたっての整地土である褐色粘質土下の暗灰色砂土であり、層位的には石敷広場よりは一層下層にある。石積は最も厚い部分で30cmを測る。石は径5～15cmほどの小さい河原石が用いられている。性格は不明である。

3 導水施設SX 675

石組溝SD 662の南18mで、瓦製土管をつなぎ合わせた東西方向にのびる導水施設SX 675を検出した。土管は、SX 673，SX 674が構築された暗灰色砂土の下層の青灰粘土を掘り込んで据えられている。土管は行基丸瓦と同じ技



法で作られており，外表は縄叩き目が残存する。全長約40cm，最大径18cm，最小径11cm前後である。最大径部が西であり，西から東へ継いでいったことがわかる。水を西から東に流すにふさわしい構造であるが，自然地形はこれとは逆に東が高く西が低いいため，その性格についてはなお問題が残る。土管の形態・製作技法からは，7世紀後半頃の構築と考えられる。

まとめ

今回検出したSX 670・SX 671・SF 680・SD 662は，1956年に検出した飛鳥寺南門の石敷広場の南端に相当する。石敷広場の南端の様子は1982年度に，本調査地の東方40mの地点で確認されている（概報13）。今回は，その南に続くSX 673

第33図 石敷広場（E・F地点）調査遺構配置図（1：200）

・SX 674・SX 675を検出し，石敷広場関係の施設はSD 662より南には広がっていないことを確認した。石敷の南縁，犬走り状の石敷，石組溝の構築法は1982年度調査のSX 660・SX 661・SD 662と同一であり，道路状遺構SF 680の東西に同様の施設が存在していたことが判明した。1982年度の成果と合わせ，飛鳥寺南門南の石敷広場の様子はより明らかになったと言えよう。すなわち，石敷SX 670の南北長は南縁石までで20.5m，SD 662の南側石までで22.2mとなる。

1956年の調査では、石敷の参道が検出されているが、石敷の参道はそのまま南へは続かず、石敷広場と交差するあたりから、幅 3.7 m ほどの空間地となり南に続いている。今回はこの空間地の南延長部を検出したが、空間地の状況は 1956年調査と同様であり、石敷広場の南限まで続き、そこで S D 662 によって限られることが判明した。また、この空間地は、整地を行なった後に石組溝・石敷と一体で作られていることから、北に続く参道と同様の性格の道路状遺構であったと考えられる。石敷広場の東・南縁石の交差状況から、この石敷広場は、参道（飛鳥寺伽藍中軸線）に対して、西で北に 7～8°の振れをもつことが確認された。また、石敷広場の下層から 7 世紀前半頃の土器・瓦が出土している。これらのことから、石敷広場は 7 世紀前半以降に造営されたものであり、その性格は、東西長 66 m 以上南北幅約 20.5 m の石敷道路、あるいは回廊などの建物基壇と考えることもできるが、今後さらに検討を必要としている。

f 飛鳥寺寺域東部（G 地点）の調査

（1984 年 5 月）

飛鳥寺東辺部の農道改修工事に伴って、G－1，G－2 の 2 地点で調査を実施した。G－1 区は寺域の東南隅部にあり、飛鳥寺創建時の瓦窯跡が立地する小丘陵の北裾部沿いの延長約 50 m の範囲である。G－2 区は安居院本堂（中金堂）の東約 150 m の位置から、さらに東に向って約 24 m の間の農道の北肩部で、東門想定地のやや東側にあたる。

G－1 区では、丘陵の西側を走る道路東端からほぼ東北東に延びる農道に沿って、長さ 13 m と 23 m、幅はいずれも約 1.5 m の 2 本のトレンチを設けた。調査の結果、旧県道の東約 25 m の位置で、花崗岩風化土（地山）に掘りこまれた、柱掘形とみられる遺構 2 つを発見した。掘形は丘の裾に東西約 2.8 m を隔てて並び、方約 1.5 m の規模である。伴出遺物はなく、調査範囲も限られているため、遺構の時期、性格等は明らかにできなかった。

G－2 区では東西 24 m、南北 1.5 m のトレンチを設けた。地表（道路）下 0.7 m ～ 1.1 m の深さで、瓦・炭を多量に含む整地層が存在し、その範囲は東端部

の幅約1 mの部分を除いては発掘区全域に及び、周囲の未発掘地域に広がっている。検出遺構としては、この整地層を切り込んで作った礎石（花崗岩製）落とし込み穴1基と、同じく整地層を切りこんだ発掘区東端に位置する幅9 m以上の南北方向に走る溝状遺構がある。溝状遺構からは瓦が出土しており、その年代から見て遺構の時期は8世紀以後と考えられる。礎石落とし込み穴からは時期を示す遺物は出土していないが、層位関係からこれも8世紀以後の所産とみられる。整地層は残存条件の良好な部分では、厚さ約60～70 cmある。整地層は炭・焼土・瓦を多量に含む粘質土が複雑に入り混じる層とその上部の比較的炭の混じる量の少ない淡黄灰色山土（厚さ約10 cm）からなる。また、整地層下部には部分的には厚さ約30 cmに及ぶ炭単純層からなる箇所がある。整地層からは須恵器、土師器、軒丸瓦、丸・平瓦が出土している。軒丸瓦は飛鳥寺創建瓦である単弁10弁軒丸瓦であり、土器は7世紀前半代のものと推定される。したがって、整地の時期は7世紀前半以降と考えられる。

この整地層の性格については、発掘範囲も狭く特定できなかったが、発掘区は飛鳥寺東門推定地に近接しており、寺周辺地域の造営・整備状況を知る手がかりとなる。また、整地層に含まれる多量の炭や丸・平瓦および軒丸瓦、土器がどこからどのような背景でここまで運ばれたのかを解明する必要も生まれてきた。今後、周辺地域の発掘を持って、再度検討したい。

g 飛鳥寺寺域北部（H地点）の調査

（1984年5月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で行なった。調査は飛鳥寺講堂の北方約80 mの地点で、飛鳥寺寺域内の北部にあたる。調査は東西6 m、南北1.5 mの発掘区を設けて実施した。検出した主要遺構は柱穴1、土壇2で、柱穴は一辺約1 mの隅丸方形掘形をもつが、時期は特定できない。今回の調査では、調査対象地の制約のため、その遺構の性格を決定できないが、今後の周辺地の調査に関して、重要な手がかりを得ることができた。

h 飛鳥寺寺域北部（I 地点）の調査

（1984 年 5 月）

この調査は、住宅改築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で実施したものである。調査地は飛鳥寺旧寺域北部にあり、飛鳥寺講堂の北東約 60 m の地点である。調査は東西 4 m、南北 3 m の発掘区を設けて実施した。調査の結果、幅 1 m、深さ 45 cm の南北溝 1 条を検出した。溝埋土からは丸・平瓦、土師器、須恵器、黒色土器が出土しており、溝の埋没時期は奈良時代末から平安時代初頭にかけてと考えられる。溝は 7 世紀代の瓦包含層を切り込んで作られており、年代の上限が飛鳥寺創建時にまではさかのぼりえないことから、溝の年代は奈良時代を中心とする時期と推定される。

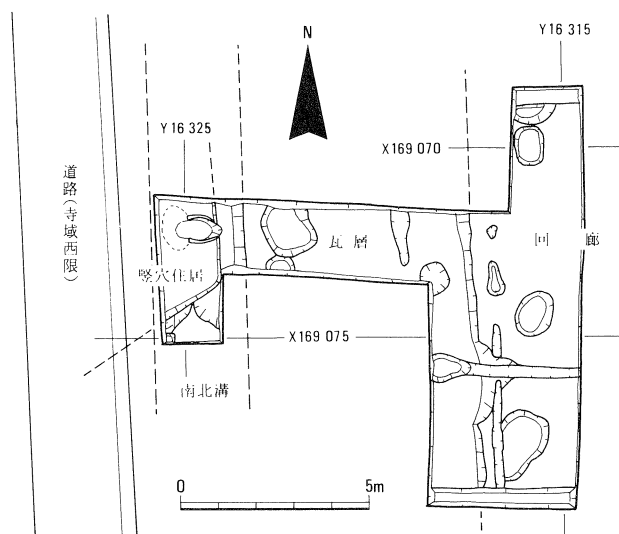
i 飛鳥寺西回廊（J 地点）及び西門（K 地点）の調査

（1985 年 1 月～2 月）

飛鳥寺の西方では安居院の西北約 120 m の西回廊西北隅付近と、その南 40 m の西門西南部との 2 ケ所で小規模な調査を行なった。

1 西回廊とその周辺の調査

調査地は、1956・57 年の調査成果によれば、回廊西北隅に近い西回廊から寺



域西限施設までの間に位置する。調査はそれらの遺構の確認を目的として実施した。主な遺構には、調査区東端の回廊基壇基底と想定される粘土層の高まりと調査区西端の南北溝がある。また、南北溝下層で飛鳥寺創建以前の竪穴住居跡を検出した。

調査の結果、調査区東端では表土層直下で粘土層がみら

第34図 飛鳥寺西回廊（J 地点）調査遺構配置図（1：200）

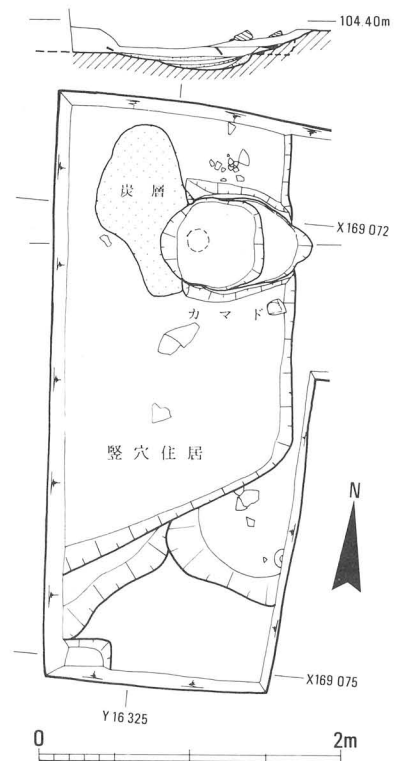
れ、それは東から約3 mの位置で西方へ急激に落ちた段状をなして南北に連なることが判明した。粘土層の位置や瓦層の広がりから判断して、この粘土層の高まりが回廊基壇の基底部を示すものと理解された。

粘土層は、瓦層の下へ一連に続く暗灰色土層の上にのった細かい土層の集まりとして存在し、基壇土あるいは整地土層を思わせる。しかし、付近一帯には飛鳥寺創建以前の遺物包含層が幾重にも重なって広がっていることが知られ、粘土層中にもそれらと同様の遺物が含まれていて厳密には回廊基壇土と断定できなかった。また粘土層の上面西端近くで、回廊基壇縁石抜取と考えられる南北に溝状に続く浅い土壌を検出した。

粘土層の高まりの西方には約20 cmの厚さで瓦層が広がり、その境にある乱雑な石列は瓦層中に含まれるものである。瓦層中の瓦は比較的大形の破片が多いものの敷かれた状況ではなく、複弁蓮華文軒丸瓦や縄叩き目の平瓦片が含まれている。また共伴する土器からみても、瓦層は奈良時代になって整地層として形成されたものであろう。瓦層の下面は西端まではほぼ平坦であるが、瓦片を含む不整形な土壌を数個確認しただけで、顕著な遺構はない。

東西トレンチ西端には南北溝がある。トレンチの制約から溝東半を瓦層の下面で検出した。断面は浅いU字形で溝幅約2.5 m、深さ約0.6 mの素掘り溝である。埋土からは多量の瓦片とともに、7世紀後半～末頃の土器片や円面硯などが出土した。この溝は、西限の施設に沿って延びるものと考えられるものの、その性格は明らかでない。

南北溝の下層で竪穴住居跡を確認した。東・南壁をそれぞれ約2 m分検出しただけで全体の形状は不明確であるが、東壁にはカマドが設けられ、カマドの中心から南約1.3 mのところで



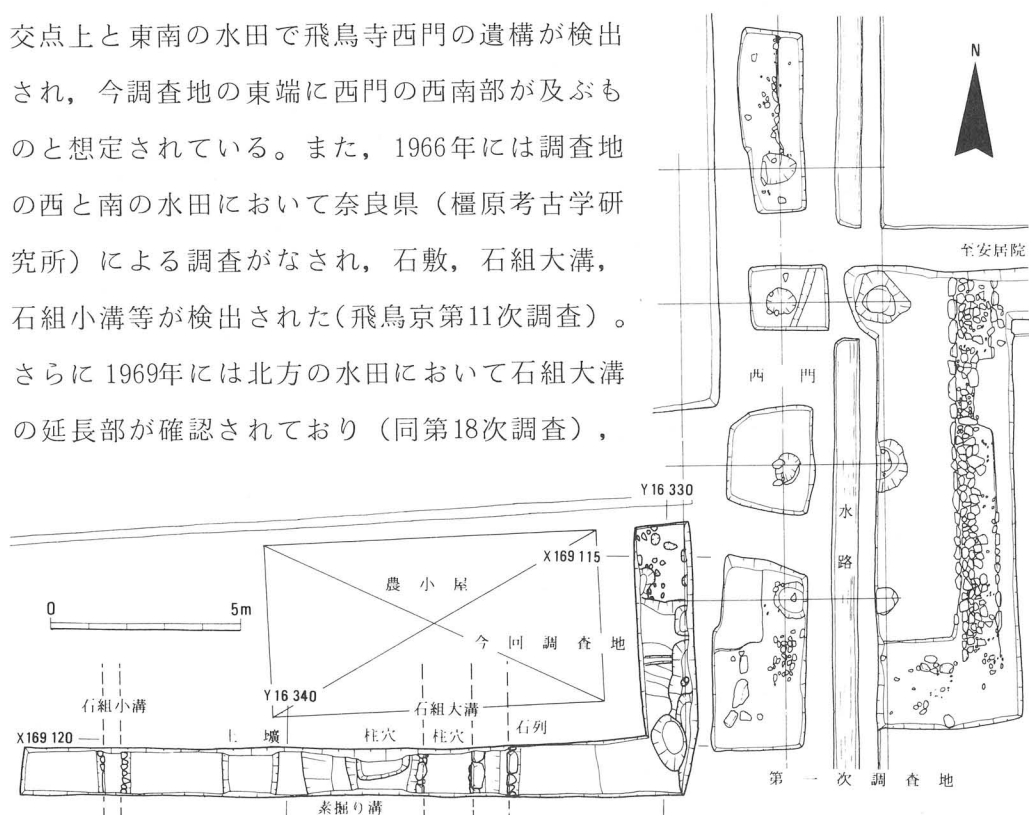
第35図 竪穴住居跡実測図(1:50)

約 120° の鈍角に折れ曲がって南壁となっている。壁はほぼ垂直に最大30 cmの高さを残しており、内・外ともに溝は認められない。この住居跡の年代は出土土器や層位から6世紀代に属すると考えられる。

飛鳥盆地ではこれまでに板蓋宮伝承地をはじめ飛鳥時代の遺構の下層で十数棟の竪穴住居跡が検出されている。本住居跡はそれに一例を加えるばかりでなく、その形状がやや特異であること、遺構の上・下限が限定できることなど、注目すべき貴重な資料である。住居の性格や地理的・年代的位置付けについては『日本書紀』の飛鳥衣縫造祖樹葉の家とも関わり、興味深いが、今後の調査研究をまって検討したい。

2 西門の調査

調査地は、安居院の西約70 mの南北旧道と通称入鹿首塚へ至る道との交点の西南にある東西に長い水田である。1956年の調査（飛鳥寺第1次）では、この交点上と東南の水田で飛鳥寺西門の遺構が検出され、今調査地の東端に西門の西南部が及ぶものと想定されている。また、1966年には調査地の西と南の水田において奈良県（橿原考古学研究所）による調査がなされ、石敷、石組大溝、石組小溝等が検出された（飛鳥京第11次調査）。さらに1969年には北方の水田において石組大溝の延長部が確認されており（同第18次調査）、



第36図 飛鳥寺西門（K地点）調査遺構配置図（1：200）

今調査地にも一連の遺構が及ぶものと推定されている。

調査は、当該地における農小屋建設にともなう事前調査であり、上記のような成果にもとずいて、西門および周辺の遺構の把握を目的として実施したものである。ただ諸々の事情から、調査区の設定は大きく制約され、遺構が充分解明されたとは言いがたい面がある。

調査の結果、東西トレンチでは西から石組小溝、石組大溝、石列等を検出し、南北トレンチでは、二種の積土層を確認した。東西トレンチで検出した石組小溝と石組大溝は、飛鳥京第11・18次調査のS D 6684・S D 6685にあたるもので、その位置、規模等は一致している。

石組小溝（県調査S D 6684）は溝幅42cm、深さ13cmで長さ1.2 m分を検出した。南方での調査分を含めると南北総長26 m以上に及んでいることになる。溝側石は、20 cm大の玉石一段からなる。溝は、礫・瓦片を含む整地層を切りこんで作られている。溝側石は総じて西側が大ぶりであり、西側石が据え付け溝の底に達するのに対して、東側石は10 cm余浮いた状況にある。この西側石の大きい点は、南の調査成果でも同じであって、溝の東西の整地層にみられる相違を重視すると、この西側石が西方の低い基壇の縁石である可能性がある。ただ、今調査ではその可否を確認することはできなかった。なお、県調査にいう礫敷S H 6687は整地土中の礫にあたるものと考えられる。

石組大溝（県S D 6685）は溝幅1.25 mで長さ1.2 m分を検出した。この溝は前述のように南13 mと、北23 mの地点で検出しているほかに、北100 mの地点での小規模な調査でも確認しており、南北約120 m程にわたり、飛鳥寺寺域西限にそって南北に設けられているものである。溝は80 cm大の大形の花崗岩一段で側石とするが、側石の上端は東と西とで異なり、東の方が約10 cm高い。東西側石の高さの違いは構築当初からのことと思われる。この点については県の調査においても同様で、後述する石列との関わりによるものと考えられる。

大溝は側石の外約90 cmの位置から大きな据え付け溝を穿って構築されている。その裏込め土中からは多量の瓦片、礫とともに、7世紀後半に至って成立すると考えられる技法でつくられた土師器甕の把手が出土した。従って、この石組

大溝は飛鳥寺創建当初からの遺構ではなく、7世紀後半以降に設けられたものと考えられる。

石組大溝の東1 mには、上端を大溝の東側石よりも約25 cm上で揃えた南北の石列がある。石列は高さ50 cm、長さ80 cm、厚さ20 cmの花崗岩を西に面を揃えて配したもので、石列以東は一段高い基壇状をなし、そこには南北トレンチ北半と南半に分けられる2種類の積土層がある。北半の積土は主に粘土、南半は粗砂・砂質土からなり、上面レベルは北半が約15 cm高い。また、南半の積土上には下から瓦層・粘土層・小石敷・粗砂層からなる整地層がある。これらは、いずれも石列より新しく、出土遺物や層位関係から見て石列は大溝と同じ7世紀後半代かそれ以後に構築され、その後平安時代初頭までに数度の整地を重ねたものと理解される。南の積土層上には円形土壇とそれを壊して東方にのびる長方形土壇がある。いずれも多量の瓦が含まれるが、長方形土壇には平安時代初めの黒色土器が含まれている。この土壇は東方での第1次調査で検出されている深い落ち込みと一連のものと推定される。

このほかに東西トレンチでは石組大溝の下と素掘り溝の下の2ヶ所で柱穴を、素掘り溝の西方で土壇を検出した。柱穴はいずれも一辺1.2 m以上の大型の掘形であるが、素掘り溝下の柱穴に瓦片が含まれず、他の二者に瓦片が含まれる違いがあり、両者は異なる時期の遺構であると思われる。

以上のように、今調査では、西門について明確な遺構は得られず、また検出した遺構にはさまざまな解釈の可能性や問題点が含まれている。そのいくつかについて触れておきたい。

西門西南部の位置する南北トレンチの積土層については、その位置から北半のそれが西門基壇に関わるとすることに疑いはない。積土層上では小石の抜取痕跡は認められたが、礎石や基壇縁石などの抜取痕跡は認められなかった。これは、先の調査で検出した礎石上面高を推算した結果、積土層上面より約40 cm上にあたることから、基壇土の大半を含めて大きく削平されていることによるものと考えられる。

南の一段低く付加された積土層とその上の整地層および石列については、石

列が北方・南方の調査では検出されておらず、また、石列の位置が推定西門心の西約7mにあって、この数値が門の梁行2間分に軒出を加えた数とほぼ一致することから、石列を基壇縁とする梁行3間の門を想定することもできる。しかしながら、その場合、石列の上面高と西門礎石上面高とは約45cmの差があり、石列を直接の基壇縁石とは見られないうえに、石列が推定基壇南端をこえて南に延びていることが理解できない難点がある。現段階では石列・整地層・積土層は、石組大溝造営と同時かそれ以後に、西門を含めた寺域西辺部一帯で行なわれた造作・整備に関わる遺構と理解しておきたい。

また、東西トレンチで確認した二時期にわたるとみられる柱穴の存在も、西辺部一帯にたび重なる改作のあることを暗示している。飛鳥寺の西方は、『日本書紀』に記された槻木の広場の存在が想定されており、その一画と見られる石神遺跡では7世紀中葉・後半・末の各時期に大改造された遺構群が重複していることが判明している。西門西方で検出された石敷、石組溝等についても同様の状況下で造営されたと理解するのが妥当であろう。

今回の調査で残された問題点の解明については、すべて今後の調査・研究の進展をまたねばならない。その中で、西門に関わる課題の解明にとって残された調査地は、今回調査をなしえなかった農小屋部分においては他にないことを付言しておきたい。

j 飛鳥寺南方（L地点）の調査

（1984年7月）

この調査は農業用倉庫新築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で実施したものである。調査地は飛鳥寺瓦窯の南約90mの地点で、奈良県が1971年度に飛鳥京第28次調査として調査を行なった水田にすぐ北接する場所である。調査は東西3m、南北8mの調査区を設定して行なった。調査の結果、7世紀代中頃以後の礫敷、藤原宮期以後の南北素掘り溝・土壇、中世以後の東西溝を検出した。調査地の土層層序は水田耕土、床土、黄灰土、礫敷面で、礫敷面は現地表下約1.1mにある。黄灰土中には藤原宮期から奈良時代初頭までの多数の土器

と少量の瓦が包含されており、蹄脚硯・円面硯も出土している。南北溝，土壙はこの礫敷を切り込んで作られている。溝，土壙とも黄灰土と同様な土器が出土している。礫敷は発掘区全域に広がり，その厚さは約10cm程である。礫敷の構築方法は，断面観察によれば，丘陵地谷筋の自然流路の埋土と推定される厚さ約1mの暗灰粘土層に，厚さ約10cmの黄褐色山土を積んで整地した後，小形の礫をやや乱雑に敷いて作られていることが判明した。なお，暗灰粘土中には，木片，銅鉾滓，瓦片，7世紀前半～中頃にかけての土器が含まれている。

礫敷の構築時期は7世紀中頃を年代の上限とし，藤原宮期～奈良時代初頭を下限とするが，その性格については，発掘区の制約もあって不明である。飛鳥京第28次調査でもこの礫敷と同様な礫敷遺構が確認されており，この付近ではかなり普遍的なものと考えられる。

3 飛鳥地域その他の調査概要

a 川原寺周辺（B地点）の調査

（1984年4月）

本調査は公民館新築に伴う事前調査として明日香村川原で行なったものである。調査地は川原寺の西南180mに位置し，川原寺・橘寺間に想定される道路上にあたる。調査は南北2.5m・東西2mのトレンチを設定して行なった。検出した主な遺構は土壙2である。トレンチ東半部にわたる土壙を埋め戻した後，トレンチ北半部にわたる土壙が掘削される。トレンチ東半の古い土壙からは14世紀代の土師器が出土しており，この地域に中世にかなりの人の手が入ったことを示している。

b 川原寺南限西部（A地点）の調査

（1984年7月～8月）

この調査は農業用倉庫建設に伴う川原寺史跡地内の現状変更として，明日香

村川原で実施した。調査地は川原寺南門の南西約100 mの地点で、川原寺寺域南西部にあたり、川原寺の南限である川原寺と橘寺との寺域境界線上にすぐ北接する。調査は東西4 m、南北8 mの発掘区を設けて行なった。地表下約25cmで、近代の井戸・東西小溝等を検出したにとどまった。調査区周辺の自然地形は南が高く北が低い丘陵地であるが、トレンチ南端の南2 mの地点では、約1.2 mの差で北（川原寺）に向って急に落ちている。さらに、トレンチの南約8 mの地点では橘寺北面築垣が想定されていることから、この段差は川原寺と橘寺の境界線として、従来から人工的なものであると考えられてきている。今回の調査では発掘区がこの境界線まで及ばず、また古代の地層が全く残存していなかったため詳細は判然とはしないが、この発掘区周辺地域が川原寺の寺域設定の際、何らかの削平・整地が行なわれたことは確実に考えられる。

c 橘寺寺域東南部の調査

（1984年10月）

本調査は史跡橘寺の旧境内地における住宅改築に伴う事前調査として行なったもので、調査地は東門推定地の南60 mにあり、寺域の東南部分に相当する。調査は東西15 m、南北2 mのトレンチを設定した結果、西から東へ下降する花崗岩風化土の地山面と、調査区東端に中世の瓦片と割石を含む幅1 m、深さ0.6 mの南北方向の素掘り溝1条を検出した。このことから西方の丘陵が中世以前には現在よりも25 m程東に張り出していたことが判明した。

d 立部寺（定林寺）東方の調査

（1984年2月）

調査は、定林寺現本堂の北に隣接する庫裡の改築予定地で実施した。発掘面積は17 m²ほどである。現地は立部寺の中心伽藍の残る小さな丘の東裾部をテラス状に削り出した狭い平坦地で、20cm程の堆積土を除くと風化した岩盤の地山が直接露出する。地山上には、中世以降の建物の痕跡と考えられる円形の浅い窪みが若干残っていたが、詳細は不明である。